

チームのネガティブな人的環境が小学生のスポーツモチベーションに与える影響

藤後 悦子（東京未来大学こども心理学部）
井梅由美子（東京未来大学こども心理学部）
大橋 恵（東京未来大学こども心理学部）

小学生の地域スポーツは、親の関与が求められ、子どものスポーツ活動がポジティブおよびネガティブに親子関係に影響する。本研究では、コーチ、仲間、応援席からのハラスメントの被害に子どもが遭うことで、親も傷つき、その結果、子どもに対してより成果を求めるような関わりを行い、子どもの神経症が促され、スポーツモチベーションが低下するというモデルを立てた。小学生4年生から高校生の子どもの持つ父親300名、母親600名を対象に、父母別に多母集団同時分析を行った。その結果、スポーツ・ハラスメントは、子どもの神経症を強めその結果子どものスポーツモチベーションを下げている。またスポーツ・ハラスメントは親のわが子中心主義や支配的対応を強め、これらを受けて子どものスポーツモチベーションが下がるという結果が示された。以上より応援席を含むスポーツ・ハラスメントの防止が急務であることが示唆された。

問題と目的

2020年の東京オリンピックを目前に控え、スポーツへの関心が、競技スポーツ、生涯スポーツともに高まっている。小学生の放課後の生活を見てみると子どものスポーツへの参加は約70%ととても高い（ベネッセ教育総合研究所, 2014）。スポーツは子ども達にとって身近なものであり、様々な影響を与えている。その多くは肯定的な影響であり、例えば競技力の向上や達成感の獲得、体力の向上（根岸, 2002）、社会性の育成（Coatsworth & Conroy, 2009）、問題行動の抑制（Donaldson & Ronan, 2006）などの効果をもたらすことが示されている。このようにスポーツは多くの肯定的な効果があるがゆえに、ある時期のみスポーツを行うのではなく、生涯学習として継続的にスポーツを行うことが望まれる。生涯にわたってスポーツへの意欲を継続させるためには、その基盤を形成するジュニア期にこそ、健全な形でスポーツモチベーションを形成しておく必要がある（藤後・井梅・大橋, 2016）。スポーツモチベーションとは、スポーツに関する動機づけとも訳されており（杉山, 2013）、生涯スポーツへの参加や継続、技術向上への意欲を支える重要な要因である。

さて、一般的に子ども達がスポーツを始めた動機や継続の理由はどのようなものだろうか。日本中学校体育連盟（2015）が全国の中学生男子4613名と女子4471名を対象に調査を行った結果、男女ともに入部理由の最も多いものは「楽しみたかった」であり、続いて「うまくなりたかった」「体を鍛えたかった」が挙げられている。このような理由で部活に入部したものの、「部活を続ける気持ちが弱くなったことはあるか」という問いに対して、「何度もあった」と答えて

いた生徒は全体で21.8%であり、「時々あった」と答えた生徒38.5%と合わせて60.3%の生徒はモチベーションが下がる時期を経験している。その理由としては「いい結果が出なかった」「他の部員との関係が悪かった」「指導方法や内容に疑問を感じた」「指導が厳しいと感じた」が上位に挙がっており、特に女子では「他の部員との関係が悪かった」が最も多かった。このようにスポーツモチベーションには、子どもを取り巻く人間関係が及ぼす影響が大きく（杉山, 2013）、具体的な人間関係の例としては、仲間関係、指導者との関係、親との関係、応援の親集団やOBとの関係が指摘されている（藤後, 2011）。

大学生を対象に過去のスポーツ場面を調査した藤後・井梅・大橋（2015）によると、半数以上がスポーツを通して、「ミスしたら舌打ちされる」、「無視される」など、仲間同士や指導者との関係で否定的な体験を有していた。また、中学生のバスケットボール選手を対象とした研究からは、仲間、指導者のみならず周囲の親から「暴言をたくさん言われる」「文句を言われたり、溜息をつかれる」などの否定的な対応をされた経験を有していることが明らかになった（藤後・浅井・勝田・川田・藤後・大浦・関谷・谷中・徳永, 2016）。さらにこのような否定的な体験を通して子ども達は、身体症状や神経症を発症していくことも報告されている（三浦, 2013）。

筆者らは子ども達が神経症を抱え追い込まれていく過程の中で、周囲の人間関係による不適切な対応に注目し、それらを「スポーツ・ハラスメント」という概念で検討してきた（藤後・川田・井梅・大橋, 2017）。スポーツ・ハラスメントを「スポーツに関わる嫌がらせ」と定義し、被害者が選手だった場合、その加害者としてコーチ、仲間、応援席の親集団、選手自

身の親が想定できるとした。具体的には、コーチによる体罰、仲間によるいじめ、応援席の親集団によるバッシング、そして自身の親からのしごきなどが想定される。スポーツ・ハラスメントは選手の神経症を促し、その結果スポーツモチベーションが低下してしまう可能性が高い。

スポーツ・ハラスメントの中でも、体罰やいじめの問題は取り上げられることが多いが、応援席の親集団や親自身のネガティブな関わり方に関する実証研究はほとんど見当たらない。自分の子どもが指導者や仲間からスポーツ・ハラスメントを受けた際、本来であれば親が子どものつらさに共感的な態度をとり子どもの気持ちに寄り添う必要がある。しかしながら、親がコーチ達の体罰を容認したり、傷ついている子どもに追い打ちをかけるように厳しい態度をとったりすることも見聞きする。

親のスポーツを通した子どもへの対応は、「スポーツ・ペアレンティング (sport parenting)」と呼ばれ、子どものスポーツ場面にまつわる子育てスタイルと、それが関係する親の子どもへの関わり方と定義されている (Holt, Tamminen, Black, Mandigo, & Fox, 2009)。スポーツ・ペアレンティングの方向は、大きく分けて受容/応答型と要求/支配型の2つに分けられる。理想的なスポーツ・ペアレンティングは、親としての要求を明確に提示しながらも子どもへは応答的に対応するという権威主義 (authoritative) スタイルや、子どもに選択肢を与え自己決定を促し、その内容を一緒に検討していくような自律支持的 (autonomy-supportive) スタイルとされる。一方、不適切なスポーツ・ペアレンティングは、子どもへの応答性が低く要求が高すぎる独裁主義的 (authoritarian) あるいは支配的 (controlling) スタイルとされている (Harwooda, & Knight, 2015)。

独裁主義的スタイルのもとでは、子どもに不健全な完全主義が形成され (Sapieja, Dunn, & Holt, 2011)、支配的なスタイルは子どもの自律性を促さない (Holt, et al, 2009)。独裁的や支配的スタイルのように親が過度にスポーツに関わることは、子どもにとって大きなストレス源になる (Brustad, 1993; 石井, 2011)。特に否定的な評価を受けたり、良い成績を残すように圧力がかかっていると感じたりすると、子どもは不安やバーンアウトを経験する。教育熱心な親の元でその期待に応えられず、スポーツから子どもが離脱する

様子を三浦 (2013) は非行臨床の「スポーツくずれ」という言葉を引き合いに出し、スポーツを途中で辞めたことからくる心理的ダメージを表す言葉として説明している。親は、子どもが幼少期から道具の購入や月謝、遠征費などの経済的な負担、当番、練習や試合会場への送迎などの時間的、身体的、そして精神的な犠牲を払ってきただけに、子どもがスポーツを辞めるという現状に対して冷たい視線を見せってしまうのであろう。

それでは、なぜ親は独裁主義的な関わりに陥り、子どもを追い込んでしまうのか。そこには個人的要因と社会文脈要因が関連する。藤後ら (2016) は、親の個人的要因と子どものスポーツモチベーションについて、親の競技レベルや競技経験、そして勝利至上主義の価値観や性格特性を取り上げ、その関係性を明らかにした。その結果、対人関係において自己中心的であるほど、過剰に他者との一体感を求めるほど、身近な人との相互理解やサポートの授受などの交流ができていない人ほど、わが子のことしか考えられず、支配的なスポーツ・ペアレンティングを強いやすいことが明らかとなった。

一方で社会文脈要因としては、コーチや応援席の親集団が作り出すチームムードや、子ども集団における実子の位置など、子どもや親自身のさまざまな対人関係 (Dorsch, Donough, & Smith, 2015) がスポーツ・ペアレンティングに影響するであろう。このような対人ストレスに加え、前述した肉体的疲労や経済的負担がさらに親のストレスを高めることとなる。バスケットボールと野球の保護者に対して蓄積的疲労感を調査した斉藤・上村 (2009) の研究では、精神的負荷は16.8%、身体的負荷は24.9%に認められた。さらに大橋・井梅・藤後 (2015) のチームスポーツにおける親の傷つき体験に関する調査によると、記述された内容は実子に関するものが多く、子どものミスやレギュラーから落とされたこと、コーチからの罵倒や不当な扱いなどが示された。特に非レギュラーの子どもは、コーチからの叱責や仲間からの無視など不当な扱いを受ける割合が高く、そのことにより親も傷ついていることが明らかとなった。監督・コーチの発するメッセージは、子どものみならず親も含めた周囲の人々にも同様の価値観を植え付けると言われている (永井, 2004)。そのため、コーチの叱責を代表とするスポーツ・ハラスメント的行為や価値観は、応援席

にも伝播し浸透している可能性が高い。

スポーツの世界では、子どもでも大人でも「強い者」の意向が優先され、強者の論理が通りやすい(永井, 2004)。つまり実子が非レギュラーであったり、レギュラーの中でも試合に出られるかどうかに関してボーダーラインであったりすると、ミスを応援席やコーチから指摘されることを目の当たりにし、親が肩身の狭い経験をするが多くなる。スポーツ・ハラスメントは、子どものみならずその親をも精神的に追い詰め、それがストレスとなりより短期に結果を求める支配的な対応で子どもに攻撃性が向けられてしまうという悪循環が生じているのかもしれない。このような実子を取り巻く状況から親同士のトラブルも起こりやすい(Blom & Drane, 2008)。

応援席の親のスポーツ・ハラスメントの実態やそれが及ぼす影響について扱った研究はほとんど見当たらない。だが、コーチの選手への叱責・罵倒、応援席の溜息やプレーへの批判が実子に向かったとき、親は程度の差はあれ実子の感情と同一視する傾向にある(Smoll & Smith, 2002)。そのため実子が卑下されることで親の自己イメージが脅かされ、それを守るために必要以上に実子に成果を求める可能性が高い。このように地域スポーツとは、親の関与が強く求められるがゆえに、子どもの成長や喜びを実感しやすく親同士のネットワークも広がるという肯定的な側面とともに、時としては親が肉体的にも精神的にも負担を抱えるという否定的な側面を有している。

以上より、本研究では、社会文脈要因のネガティブな人的環境としてコーチ、仲間、応援席からのスポーツ・ハラスメント、親要因として支配的対応、わが子中心主義、スポーツ同一化、子ども要因としてスポーツ神経症を取り上げ、これらが子どものスポーツモチベーションにどのように影響を与えているのかを検討することとした。

ただしスポーツ・ペアレンティングのスタイルは、父親と母親では異なる可能性もあり、かつ子どもの性別でも違いが生じる可能性が高い。例えば母親が息子のサッカーに関わる場合、自身のサッカー経験が少ないため、スポーツ同一化が弱いかもしれない。一方チームの手伝いは母親が中心になることが多いため、応援席の親同士の関係に巻き込まれることが多いかもしれない。よって、親の性別による違いを併せて検討することとした。

方 法

調査手続き

2014年3月、調査会社に委託してオンライン調査を実施した。

調査対象

小学校時代にスポーツチームに所属している、あるいは過去にしていたことがある、小学校4年生～高校生の子どもを持つ父親300名(平均年齢46.9歳、31～68歳、 $SD=5.24$) および母親600名(平均年齢44.4歳、29～58歳、 $SD=5.00$)を対象に調査を実施した。チームの強さで条件を揃えるために、子どもが所属しているチームが県大会以上の強いチームである者と地区大会以下の弱いチームである者が同数になるように割り付けた。調査範囲は全国区であり、北海道5.2%、東北8.6%、関東33.8%、北陸・甲信6.1%、東海12.0%、関西18.3%、中国5.0%、四国2.5%、九州8.4%の割合であった。回答に不備のあった者(全項目で同じ評定値を選んでいるなど)を除外し、最終的な分析対象者は、男性287名(平均年齢46.98歳、31～68歳、 $SD=5.25$)、女性586名(平均年齢44.37歳、30～58歳、 $SD=4.98$)、計873名であった。

子どもの競技レベルと所属するチームの競技レベル (以降、子レベル、チームレベルと呼ぶ)

子レベルをスタメン/レギュラー、準レギュラー、補欠、それ以下の4段階で尋ねた。また、チームレベルを全国大会レベル、県(都)大会レベル、地区大会上位レベル、それ以下の4段階で尋ねた。

スポーツモチベーション

スポーツに関する動機づけ(松本・竹中・高家, 2003)を参考に、ジュニア期のスポーツの原点である「楽しんでいる」などを含んだ「内発的動機づけ」に関する項目、また親子のかかわりの中で、親の価値を重視し、周囲の評価を気にするなどの評価懸念に関する項目の合計8項目を採用した。これらについて「全くない」(1点)から「非常にあてはまる」(6点)の6件法で尋ねた。本調査対象者を用いてスポーツモチベーションの尺度構成の確認を行った研究より(藤後・大橋・井梅, 2017)、2因子が抽出され、第一因子は4項目で構成され、「運動することがよいこと」

「没頭していた」「楽しんでいた」などの内容であったため「内発的動機づけ」($\alpha=.87$)とした。第二因子は4項目で構成され、「運動を続けないとだめな人になると思っていた」「運動しないと罪悪感を感じていた」などの内容であったため「取入れ」($\alpha=.83$)とした。

スポーツ神経症

Kessler et al. (2002) が精神疾患のスクリーニング尺度を古川・大野・宇田・中根 (2003) が邦訳し、信頼性・妥当性を検討したK6 を参考にスポーツ場面に置き換えて項目を設定した(例:「子どもは、練習や試合前になると、お腹が痛くなっていた」「子どもは、練習や試合の前、眠れないことがあった」)。

スポーツ・ハラスメント

親が認知するスポーツ・ハラスメントに関する18項目を取り上げた。これも本調査対象者により別紙で開発しているため、それらを分析に用いることとした(藤後ら, 2017)。スポーツ・ハラスメントはコーチハラスメント、仲間ハラスメント、応援席ハラスメントに分類された。コーチハラスメントとは、「ためいきや舌打ちをされた」、「ばか、センスがないなど人格や能力を否定される言葉で怒鳴られた」、「無視された」などの6項目で構成されている。仲間ハラスメントは「話しかけても無視された」「やりたくないことを強制された」「ボールなどをわざとまわそうとしなかった」などの6項目で構成されている。応援席ハラスメントは「ためいきや舌打ちをされた」「ダメ出しされた」などの6項目で構成されている。これらの項目全てを、全くあてはまらない(1点)～非常にあてはまる(6点)の6件法で尋ねた。

親の支配的対応

別紙で開発したスポーツ・ペアレンティング尺度(藤後ら, 2017)の3因子のうち、本研究では、親のネガティブな対応を取り上げるため、支配的対応を取り上げた。表1に示す項目について、全くあてはまらない(1点)～非常にあてはまる(6点)の6件法で尋ねた。

わが子中心主義

永井(2004)のエピソードを中心にわが子に関して自己中心的にしかかわる内容(表2)の項目について

「全くあてはまらない」(1点)から「非常にあてはまる」(6点)の6件法で尋ねた。

スポーツ同一化

調査項目の作成にあたって、子どものスポーツ場面で起こりうる保護者の行動や言動の実際を把握するために、都内在住で子どもを地域のスポーツクラブに参加させている母親7名(子どもが参加している種目はサッカー2名、野球1名、バスケットボール3名)から、インタビュー形式にて、「お子さんの参加するスポーツのクラブにあなた自身が関わる中で、①問題と思われる(他の)保護者の行動や言動、②親子の関わりで問題だと感じる事」について自由に挙げてもらった。この予備調査の内容を参考に作成した9項目の内容は表3の通りであり、内的整合性は高かった($\alpha=0.912$)。各項目を全くあてはまらない(1点)～非常にあてはまる(6点)の6件法で尋ねた。

倫理的配慮

東京未来大学の倫理委員会の審査を経て調査を実施した。回答は自由意志であること、匿名性が保たれること、学術的な利用を行うことを述べ、同意した者にのみ回答を求めた。

結 果

回答者の属性

まず親の性別ごとに実子の属性を確認したところ、スポーツの種類、チームレベル、子レベル全てにおいて父母でほぼ同じ割合となった。スポーツの種類では、サッカーと野球が最も多く、バスケットボール、バレーボールが続いた。チームレベルでは、県大会以上が最も多く、続いて地区上位、それ以下、全国大会であった。子どものレベルは、レギュラー(57.3%)が最も多かった。

次に、子どもの性別ごとに種類を見ると、男子ではサッカーと野球、女子ではバスケットボールとバレーボールが多いものの、数値としてはその他が最も多かった。その他の競技としては、詳細には尋ねなかったものの自由記述の記載などを鑑みると、新体操、剣道、卓球、クラシック・バレエなどが見られた(詳細は、藤後ら(2017)参照)。

スポーツ場面における親要因

本研究では、子どものスポーツを取り巻くネガティブな人的環境としてスポーツ・ハラスメントと親要因を取り上げた。ここでは今まであまり議論されてこなかったネガティブな親要因の実態について明らかにする。はじめに親の支配的対応に対する6項目を概観すると、表1に示す通り平均点の上位は項目1 (2.79)、項目3 (2.63) そして項目5 (2.56) と項目6 (2.55) がほぼ同点であった。「とてもそう思う」が最も高い割合だったものは、項目3であった。次にわが子中心主義の各項目を概観すると、表2に示す通り項目4 (2.46)、項目8 (2.28)、項目5 (2.06) であった。

スポーツ同一化の各項目の中で平均点の上位は

表3に示す通り項目7 (3.60)、項目1 (3.57)、項目4 (3.16) であった。ネガティブな内容である項目6「子どものプレーがうまくいかないと、自分が失敗したように感じる」は、「ややそう思う」から「とてもそう思う」までを合算すると34.3%であり、項目8「子どもが失敗して怒られると、自分も怒られている気がする」は37.7%、約3人に1人が子どもの失敗に対してネガティブな感情を抱き、その結果、項目9「子どもの活躍の度合いにより保護者間での立場が上下するように感じる」と28.2%の人が答えている。

表1 親の支配的対応の各項目の割合(%)、平均点(M)、標準偏差(SD)

	全く そう 思わ ない (%)	そう 思 わ ない (%)	あ ま り そ う 思 わ ない (%)	や や そ う 思 う (%)	そ う 思 う (%)	と て も そ う 思 う (%)	M(SD)
項目1 子どもが試合や練習でうまく行かなかったプレーについて、試合や練習後に改めて怒っていた。	25.1	16.9	24.2	24.1	6.7	3.0	2.79 (1.38)
項目2 子どもがプレーでミスした時は、上手になるまで、遊ぶ時間やお小遣いを制限するなどの罰を与えていた。	56.1	13.6	18.1	8.9	2.8	0.6	1.90 (1.19)
項目3 子どもには、やられたらやり返せと伝えていた。	32.7	16.2	21.1	20.0	5.7	4.3	2.63 (1.46)
項目4 子どもには、嫌なことがあってもレギュラーをとるためなら我慢した方がよいと伝えていた。	39.9	15.3	26.6	13.6	2.9	1.8	2.30 (1.29)
項目5 子どもが上手にできていなかったら、できるまで何度でも練習させていた。	30.9	17.8	25.6	18.9	4.6	2.3	2.56 (1.34)
項目6 子どもには、毎回試合について反省させていた。	31.4	19.8	22.7	17.7	6.3	2.1	2.55 (1.37)

表2 わが子中心主義の各項目の割合(%)、平均点(M)、標準偏差(SD)

	全く そ う 思 わ ない (%)	そ う 思 わ ない (%)	あ ま り そ う 思 わ ない (%)	や や そ う 思 う (%)	そ う 思 う (%)	と て も そ う 思 う (%)	M(SD)
項目1 子どもがコーチに嫌われないために、コーチの機嫌をとっていた(とっている)	46.7	22.3	18.9	8.9	2.9	0.3	2.01 (1.15)
項目2 子どもが有利になるように、強い選手の親とは意識的に仲良くしていた(している)	53.0	18.4	17.8	8.1	2.2	0.4	1.90 (1.14)
項目3 子どもが強いチームに所属できるよう調整していた。	55.2	15.9	17.3	9.3	1.7	0.6	1.88 (1.15)
項目4 チームのことより、子どものメリットを優先して行動していた。	32.7	18.6	27.4	16.2	3.4	1.7	2.46 (1.28)
項目5 わが子がうまくなるために、チームの子たちを誘って、隠れてトレーニングしていた。	49.2	17.6	18.3	10.6	3.3	1.0	2.05 (1.25)
項目6 子どもに対するコーチの指導方針が気に入らないときは、黙っていられた。	42.9	21.1	21.3	10.8	2.4	1.4	2.14 (1.23)
項目7 子どもが活躍しない試合では、コーチやチームメイトが許せなかった。	50.6	19.1	19.0	9.4	1.3	0.6	1.94 (1.13)
項目8 チームが勝手も、子どもが活躍しないと不満であった。	39.1	21.3	19.9	14.3	4.2	1.1	2.28 (1.29)

表3 スポーツ同一化の各項目の割合(%)、平均点(M)、標準偏差(SD)

	全く 思わ ない(%)	そう 思 わ ない(%)	あ ま り 思 わ ない(%)	や や そ う 思 う(%)	そ う 思 う(%)	と と も 思 う(%)	M(SD)
項目1 子どもが活躍すると、自分がほめられた気がする。	11.9	12.0	22.2	30.8	13.7	9.4	3.57 (1.40)
項目2 子どもがチームで認められると、自分も認められた気がする。	13.7	13.8	24.3	28.7	12.2	7.3	3.40 (1.39)
項目3 子どもが試合で活躍すると、保護者間での自分の立場も上がる気がする。	19.9	16.8	30.6	22.8	6.3	3.7	2.95 (1.32)
項目4 子どもの気持ちが沈んでいると、一緒になって落ち込む。	15.0	15.4	31.9	24.3	8.3	5.0	3.16 (1.31)
項目5 子どもがうまくプレーできていないと、イライラする。	17.0	14.8	27.8	28.7	8.3	3.4	3.12 (1.31)
項目6 子どものプレーがうまくいかないと、自分が失敗したように感じる。	18.9	16.4	30.4	24.7	6.7	2.9	2.98 (1.28)
項目7 子どもが試合でミスをする、周りの人に申し訳ない気持ちになる	11.9	10.7	18.2	38.0	13.9	7.3	3.60 (1.34)
項目8 子どもが失敗して怒られると、自分も怒られている気がする。	16.4	15.7	30.2	28.0	6.6	3.1	3.07 (1.26)
項目9 子どもの活躍の度合いにより保護者間での立場が上下するように感じる。	22.4	19.6	29.9	19.8	5.7	2.7	2.79 (1.30)

各下位尺度の分散分析

ここではスポーツモチベーション、スポーツ神経症、スポーツ・ハラスメントの下位尺度、親の支配的対応、わが子中心主義、スポーツ同一化を取り上げ、それぞれの得点を従属変数とし、性別(男/女)、子レベル(スタメン/レギュラー/準レギュラー/補欠/それ以下)、チームレベル(全国大会レベル/県(都)大会レベル/地区大会上位レベル/それ以下)の3つを独立変数とした、3要因の分散分析を行った。統計分析はSPSS statistics 21.0 (IBM社)を使用した。

スポーツモチベーション尺度では、「内発的動機づけ」で子レベルによる主効果が示された($F(3,841)=14.125, p<.01$)。多重比較によれば、スタメン/レギュラー(4.85)は、準レギュラー(4.42)、補欠(4.11)、それ以下(3.83)より、準レギュラーはそれ以下より「内発的動機づけ」の得点が有意に高かった。スポーツ神経症は、子レベルによる主効果が示された($F(3,841)=3.452, p<0.05$)。多重比較の結果、準レギュラー(2.39)は、スタメンレギュラー(2.10)よりスポーツ神経症の得点が有意に高かった。

次にスポーツ・ハラスメントでは、コーチハラスメントでチームレベルによる主効果が示された($F(3,841)=4.462, p<.01$)。多重比較の結果、県大会レベル(3.34)が、それ以下(2.56)より得点が高かった。仲間ハラスメントでは、子どもの性別と子レベルで交互作用が示された。性別の差としては、レギュラーで女子(2.55)が男子(2.21)より得点が高く、準レギュラーで女子(3.15)が男子(2.52)より得点が高く、補欠では男子(3.07)が女子(2.33)より

得点が高かった。また子レベルでは、男子の中では準レギュラー(2.52)が、レギュラー(2.21)より得点が高く、補欠(3.07)がレギュラー(2.21)、準レギュラー(2.52)、その他(2.51)より得点が高かった。女子では、準レギュラー(3.15)が、レギュラー(2.55)と補欠(2.33)とそれ以下(2.44)より得点が高かった。

最後に、親要因としての支配的対応、わが子中心主義、スポーツ同一化については、5%水準で有意な結果は示されなかった。

各尺度の相関関係

次に、各尺度の相関関係を検討した(表4)。その結果、スポーツ神経症には、勝利至上主義を除くすべての変数と有意な正の相関関係が示された。スポーツモチベーションの下位尺度である「内発的動機づけ」は、「コーチハラスメント」「仲間ハラスメント」「応援席ハラスメント」のすべてと負の相関が示された。さらに、わが子中心主義とスポーツ神経症は負の相関が示された。「取入れ」は、スポーツ・ハラスメントの3つの下位尺度及びわが子中心、スポーツ同一化、スポーツ神経症と正の相関が示された。

表4 各尺度の相関関係

	コーチ ハラス メント	仲間 ハラス メント	応援席 ハラス メント	支配的 対応	わが子 中心主義	スポーツ 同一化	スポーツ 神経症	内発的 動機づけ	取り入れ
コーチハラスメント	—	.522 **	.543 **	.323 **	.431 **	.241 **	.466 **	-.167 **	.263 **
仲間ハラスメント		—	.734 **	.387 **	.462 **	.247 **	.589 **	-.268 **	.306 **
応援席ハラスメント			—	.446 **	.551 **	.201 **	.547 **	-.247 **	.299 **
支配的対応				—	.735 **	.281 **	.493 **	-.205 **	.417 **
わが子中心主義					—	.264 **	.567 **	-.278 **	.419 **
スポーツ同一化						—	.329 **	.036	.300 **
スポーツ神経症							—	-.343 **	.484 **
内発的動機づけ								—	.060

* $p < .05$, ** $p < .01$

子どものスポーツモチベーションに影響する要因

スポーツ・ハラスメントと親要因が、子どもの神経症を通して、子どものスポーツモチベーションに与える影響を予測するモデルを構築するために、最尤推定法を用いて共分散構造分析を行った。先行研究に基づいて構成した仮説モデルは、スポーツ・ハラスメントからスポーツ神経症、親要因、スポーツモチベーションへの直接パス、そして親要因とスポーツ神経症からスポーツモチベーションへのパスを考えた。先行研究からは、親の性別による違いが指摘されていたため、親の性別ごとに分析を行ったところ、ともにモデルは良好であった（父親：GFI=.967, AGFI=.921, CFI=.982, RMSEA=.062, AIC=112.150, BIC=229.253/母親：GFI=.976, AGFI=.942, CFI=.976, RMSEA=.062, AIC=137.924, BIC=309.871）。

次に親の性別によってモデルが異なるかどうかを確認するために多母集団同時分析を行った。等値制約を置かずに分析を行ったところ、パス係数の一対比較の親の性別において係数が複数有意になったが、適合度は良好であった（GFI=.976, AGFI=.939, CFI=.981, RMSEA=.041, AIC=241.253）。そこでこれら有意になったパスに制約をかけて等値制約を用いたモデルにより分析を行ったところ、良好な結果が得られた（GFI=.968, AGFI=.929, CFI=.973, RMSEA=.046, AIC=263.651）。等値制約の有無で比較した結果、「制約なし」のモデルの方が当てはまりが良かったので、「制約なし」のモデルを採用するこ

ととした。

分析の結果、有意になったパスのみを図1（父親を対象とした結果は父親モデル、母親を対象とした結果は母親モデルと以下記す）に示した。まずスポーツ・ハラスメントは、「応援席ハラスメント」（父.74、母.69）、「仲間ハラスメント」（父.70、母.69）、「コーチハラスメント」（父.57、母.58）から構成されていることが確認できた。スポーツ・ハラスメントは、子どものスポーツ神経症へ直接パスが示され（父.80、母.80）、説明率は父65%、母66%と高い値が示された。またスポーツ神経症は、「内発的動機づけ」に負のパス（父-.18、母-.29）を示し、「取り入れ」には正のパス（父.48、母.51）を示した。

次にスポーツ・ハラスメントと親要因との関係であるが、スポーツ・ハラスメントから親の支配的対応（父.73、母.55）、わが子中心主義（父.80、母.69）、子どもへのスポーツ同一化（父.42、母.41）にそれぞれ正のパスが示された。またこの親要因がモチベーションに及ぼす影響として、親の支配的対応から母のみ「取り入れ」に正のパス（.17）、わが子中心主義からは「内発的動機づけ」に負のパス（父-.32、母-.10）、スポーツ同一化から「内発的動機づけ」に正のパス（父.12、母.14）が示された。

最後に子ども要因であるが、子レベルからスポーツ神経症へは正のパス（父.13、母.12）、「内発的動機づけ」には負のパス（父-.23、母-.27）、「取り入れ」には負のパス（父-.16、母-.08）が示された。

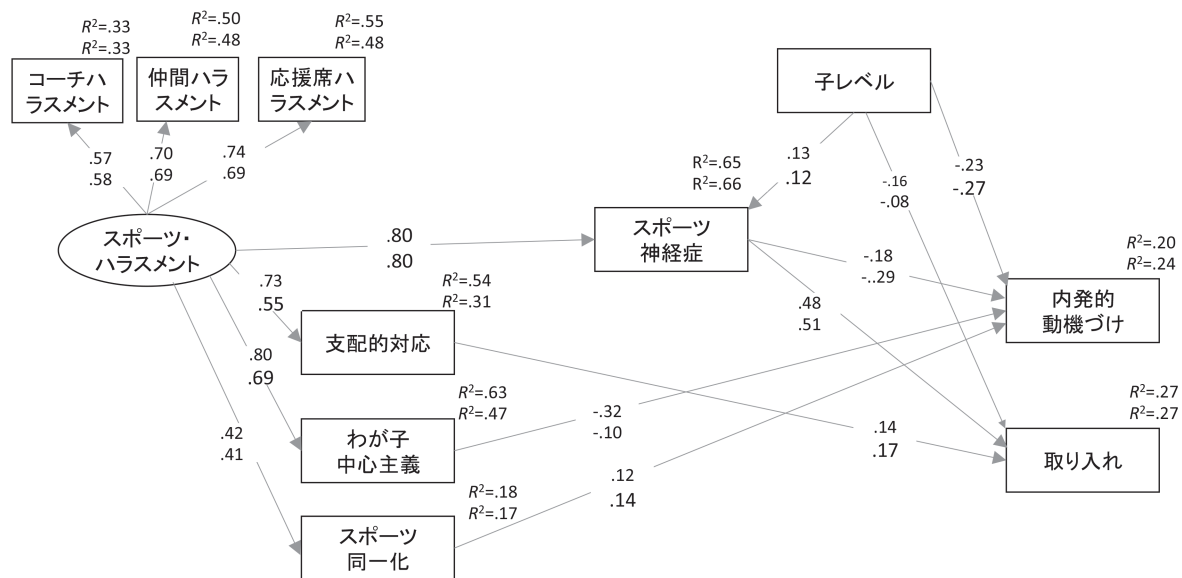


図1 スポーツ・モチベーションの規定モデル

上段：父親、下段：母親 AIC=241.253 GFI=.976 AGFI=.939 CFI=.981 RMSEA=.041

考 察

子どものスポーツモチベーションに関係するネガティブな人的環境の実態

筆者らは別紙で子どものスポーツモチベーションを高める要因として親のパーソナリティを中心として分析を行い、報告している（藤後ら、2016）。そこでは親のパーソナリティ要因として対人関係において自己中心的であり、過剰に他者との一体感を求める一方、身近な人との相互理解やサポートの授受など交流ができていない人ほど、「わが子中心主義」を促進させ、その結果実子に支配的対応を行い、実子のモチベーションを低下させやすいことが明らかとなった。

本研究では親のパーソナリティ要因ではなく、社会文脈要因としてネガティブな対人関係であるスポーツ・ハラスメントを取り上げ、コーチ、仲間、そして応援席からのハラスメントの被害実態を中心に検討した。その結果、仲間ハラスメントにはチームレベルと子レベルの交互作用が示された。レギュラー、準レギュラーにおいては女子の方が仲間ハラスメントが多いが、補欠では男子の方が多かった。また子の競技レベル別では、男子では補欠が最も仲間ハラスメントが多かった。一方女子では、準レギュラーが最も仲間ハラスメントが多かった。これは運動部の仲間集団における社会的地位の重要な決定因は競技力であり、能

力が高い者が集団の地位も高くなることが多いというSmoll & Smith (2002) の指摘からも妥当な結果であろう。競技レベルの低い選手ほど、試合中のミスなどに対する仲間からの失笑やからかいが増えるのであろう。しかしながら、男子と女子では少し様相が異なっており、男子では補欠、女子では準レギュラーが最もつらい立場となっていた。ただし、地域スポーツの場合女子の人口は男子に比べて少ないため、女子の準レギュラーが男子の補欠と類似の立場であることも考えられる。

コーチハラスメントに関しては、県大会レベルがそれ以下より得点が高かった。地域スポーツの場合、楽しむことに主眼を置くチームと勝利を第一と考えるチームとに二極化する傾向がある。特に楽しむことに主眼を置いた場合、小学生でまだ幼いことも考慮し、遊びの延長上としてのスポーツを位置づけることも多く、そのためハラスメントは少なくなる傾向があろう。一方で、県大会に出場するレベルになると、コーチの期待も高まり、特に親がコーチを兼任している場合、何としても子どもを勝たせたいなど過剰な期待も加わり、よりハラスメント的な対応になってしまうのかもしれない。

子どものスポーツモチベーションに影響を及ぼす要因

従来のスポーツに関する研究では、コーチの関わり

が子どものモチベーションに影響を与えることが指摘されてきた。地域スポーツでは、親の関与が不可欠であり、親や応援席の親集団が選手に与える影響も大きい。そこで、本研究では応援席ハラスメントを含むスポーツ・ハラスメントが子どもの神経症や親要因を通してスポーツモチベーションに影響を与えるというモデルを作成した。

はじめにネガティブな人的環境としてのスポーツ・ハラスメントは、コーチハラスメント、仲間ハラスメント、応援席ハラスメントから構成され、その中でも応援席ハラスメントの割合は高かった。次に親要因として支配的対応、わが子中心主義とスポーツ同一化を取り上げ、これらがスポーツ神経症およびスポーツモチベーションに与える影響を父母別の多母集団同時分析で検討した。その結果、スポーツ・ハラスメントからスポーツ神経症、親の支配的対応、わが子中心主義へのパス係数は大きく説明率も高かった。またスポーツ・ハラスメントはスポーツ神経症を通して選手のスポーツへの「内発的動機づけ」を弱め、取り入れを高めていた。一方、スポーツ・ハラスメントは親の支配的対応を強め、その結果「取り入れ」を高め、もう一方でわが子中心主義を高め、「内発的動機づけ」を弱めている結果も示された。

すなわちスポーツ・ハラスメントは、子どものスポーツ神経症に大きな影響を与えていると同時に、選手の親の振る舞いにも影響を与えていた。興味深いことに、親要因としての支配的対応、わが子中心主義、スポーツ同一化は子レベル、チームレベル、性別による得点の違いは見られなかった。すなわちあるチームに子どもが所属した場合、子どものレベルの高低やチームレベルの高低によって、親が子どもに支配的にふるまったり、わが子中心主義的にふるまったりするのではなく、むしろ仲間、コーチ、応援席等ハラスメントがわが子に向いたとき、親は子どもを守るために、また子どもを通じた親自身の自己評価を下げないように防衛的な態度として子どもに支配的にふるまったり、チームの中でもわが子中心主義的にふるまったりする行動が生じてしまうのであろう。これらの行動は、ある特定の人のみが行うのではなく、チーム全体に伝播し、チームとしてもスポーツ・ハラスメントを容認し、わが子のことしか考えない雰囲気が出来上がってくるのが推測できる。さらにこのような親の過剰な行動は、結果的にスポーツ・ハラスメントから子ども

を守り、よりよいスポーツ環境を提供することにはつながらず、子ども自身のスポーツモチベーションを下げる結果となってしまっているのである。

父母別の特徴を見ると、父親の方が母親に比べ、スポーツ・ハラスメントからの影響を受けており、より子どもに対して支配的にふるまったり、わが子中心主義的にふるまったりする傾向が高かった。その結果、子どもの「内発的動機づけ」へも負の影響を及ぼしていた。そもそも男性の方がサッカー、野球、ラグビー、バスケ、バレーなどチームスポーツに幼少期から関わる経験が多く常に勝敗を意識し、勝利を意識したスポーツ文化で過ごしていた過去の経験なども関連するのかもしれない。

スポーツモチベーションの低下やスポーツ神経症を防ぐには

スポーツ神経症には、コーチ、仲間、応援席からのハラスメント、そして親の支配的対応やスポーツ同一化、わが子中心主義という多面的な影響が示された。例えばチーム内でスポーツ・ハラスメントが発生した場合、それに対して抵抗したり止めたりしないと、チームの中にスポーツ・ハラスメントを容認する雰囲気が出来てしまい、仲間、応援席まで連鎖していく。そして実子がコーチや仲間から怒鳴られたり、無視されたり、嘲笑されたりすることにより、親も傷つき追い込まれていくのである。つまり親による子どもへの不適切な対応を防止するためには、ミスした選手に対して温かく見守り、課題解決を優先させるチームムードが必要となる。そのためには、しっかりとコーチへの研修を行うとともに子どもに関わる親達への啓発も必要となる。森・ラインド・ガーヴィス・カラン・中本・エルメス・濱田・坂中・中村・山田(2015)は、日本における指導者の体罰や虐待の現状から、イギリスの保護制度の例を挙げ、日本においてもその必要性を指摘している。イギリスの保護制度とは、制度の包括性、スポーツに関する虐待の定義、指導者による実践の提示、子どもと関わる態度が不適切な大人の排除制度、コーチング制度の資格整備など充実したものとなっている。

これらを全て踏襲することは難しいかもしれないが、少なくとも指導者のハラスメントによる負の連鎖は本研究からも確認されており、早急な対策が求められる。例えば、ノルウェーのサッカー協会は、コーチと

親に対する提言を表明している(小野, 1998)。このように積極的にコーチや親達にスポーツを通した子ども達との関わり方を啓発していくことが必要となってくるであろう。特に日本ではまだ親へのアプローチは大変遅れており、さらなる親への介入が急務であろう。

本研究の限界と今後の課題

本研究は、あくまでも親の認知という視点から調査を実施し、親が認知するスポーツ・ハラスメントの実態やスポーツを通した親子関係を明らかにした。親を対象とした理由としては、本研究では応援席の中で起きている応援席ハラスメントや親自身の不適切な対応という新しい視点を取り入れるため、応援席の中にいる親がその実態を最も把握しているであろうと考えたからであった。

しかし、子どもが実際に仲間やコーチや応援席からのハラスメントをどのように感じていたか、またどの程度スポーツ神経症を実感していたのかなどは、対象者が幼いこともあり今回は対象としなかった。また、種目によって指導スタイルが異なるという説があるが、種目による検討も行えていない。今後は子ども側の視点からの検討や種目による差の検討も視野に入れていくことが期待される。

引用文献

- ベネッセ教育総合研究所 (2014). 教育ニュース <http://benesse.jp/blog/20140312/p2.html> (2016年10月21日)
- Blom, L. C. & Drane, D. (2008). Parents' Sideline Comments: Exploring the Reality of a Growing Issue. *Athletic Insight* (The Online Journal of Sport Psychology), 10 (3), <http://www.athleticinsight.com/>
- Brustad, R. J. (1993). Who will go out and play? Parental and psychological influences on children's attraction to physical activity. *Pediatric Science*, 5, 210-223.
- Coatsworth, J. D., & Conroy, D. E. (2009). The effects of autonomy-supportive coaching, need satisfaction, and self-perceptions on initiative and identity in youth swimmers. *Developmental Psychology*, 45(2), 320-328.
- Donaldson, S.J. & Ronan, K. R. (2006). The effects of sports participation on young adolescents' emotional well-being. *Adolescence*, 41, 369-389.
- Dorsch, T. E., Donough, M. H., & Smith, A. L. (2015). Early socialization of parents through organized youth sport. *Sport, Exercise, and Performance Psychology*, 4(1), 3-18.
- 古川壽亮・大野裕・宇田英典・中根允文 (2003). 一般人口中の精神疾患の簡便なスクリーニングに関する研究：平成14年度厚生労働科学研究費補助金(厚生労働科学特別研究事業)心の健康問題と対策基盤の実態に関する研究協力報告書
- Harwood, C.G. & Knight, C.J. (2015). Parenting in youth sport: A position paper on parenting expertise. *Psychology of Sport and Exercise*, 16(1), 24-35.
- Holt, N.L., Tamminen, K.A., Black, D.E., Mandigo, J.L., & Fox, K.R. (2009). Youth sport parenting styles and practices. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 31, 37-59.
- 石井源信 (2011). 発達の視点から見たジュニアスポーツの現状と課題 杉原隆編 生涯スポーツの心理学—生涯発達の視点からみたスポーツの世界— 福村出版 100-106.
- Kessler, R.C., Andrews, G., Colpe, L.J., Hiripi, E., Mroczek, D.K., Normand, S.-L.T., Walters, E.E., & Zaslavsky, A. (2002). Short screening scales to monitor population prevalences and trends in nonspecific psychological distress. *Psychological Medicine*, 32, 959-976.
- 三浦捷也 (2013). 少年スポーツと教育の未来 角川学芸出版
- 松本裕史・竹中晃二・高家望 (2003). 自己決定理論に基づく運動継続のための動機づけ尺度の開発—信頼性お

- よび妥当性の検討 健康支援, 5(2), 120-129.
- 森克己・D.ラインド・M.ガーヴィス・M.カラン・中本浩揮・D.エルメス・濱田幸二・坂中美郷・中村勇・山田理恵 (2015). 我が国におけるスポーツ指導者による子どもに対する虐待及び体罰の現状と子ども保護制度の必要性 学術研究紀要, 50, 17-24
- 永井洋一 (2004). スポーツは「良い子」を育てるか 生活人新書
- 根岸伸幸 (2002). スポーツ少年団における教育的効果の検証 武蔵丘短期大学紀要, 10, 61-83.
- 日本中学校体育連盟 (2015). 中学3年生対象の調査結果「入部理由, 部活で身に付けたこと, 退部を迷ったとき・・・」 設立60周年記念誌 (会報48号), 115-128.
- 大橋恵・井梅由美子・藤後悦子 (2015). 地域スポーツにおける親子の喜びと傷つき—自由記述法による検討— 東京未来大学紀要, 8, 27-37.
- 小野剛 (1998). 世界に通用するプレーヤー育成のためのクリエイティブサッカー・コーチング 大修館書店
- 斉藤功・上村佐和子 (2009). スポーツ少年団団員を支える保護者の疲労状況. 第44回日本理学療法学会大会抄録集, 36(2), P1-438.
- Sapieja, K. M., Dunn, J. G. H., & Holt, N. L. (2011). Perfectionism and perceptions of parenting styles in male youth soccer. Journal of Sport Exercise Psychology, 33(1), 20-39.
- Smoll, F.L. and Smith, R.E. (2002). Children and Youth in Sport; A Biopsychological Perspective. Kendall/Hunt, Iowa. (杉山佳生: スポーツによる子どもの心理社会的発達: 親および仲間の影響. 市村操一・杉山佳生・山本裕二訳編: ジュニアスポーツの心理学; 59-72, 大修館, 2008)
- 杉山佳生 (2013). 第7章 ジュニアスポーツと動機づけ 西田保編著『スポーツモチベーション』, 106-117, 大修館書店.
- 藤後悦子 (2011). 小学生の地域スポーツにおける勝利至上主義と心理的マルチリートメント、岸本肇教授退職記念論文集編集委員会編「からだと心」の発達と教育・体育・スポーツ 東京未来大学, 229-245.
- 藤後悦子・浅井健史・勝田紗代・川田裕次郎・藤後淳一・大浦宗博・関谷悠介・谷中風次・徳永裕典 (2016). 中学生のバスケットボールソフトボールチームへの森田療法を用いた心理サポートの可能性 モチベーション研究所紀要, 5, 25-37.
- 藤後悦子・川田裕次郎・井梅由美子・大橋恵 (2017). 小学生の地域スポーツにかかわる親のスポーツ・ペアレンティング コミュニティ心理学研究, 21, ページ数未定
- 藤後悦子・井梅由美子・大橋恵 (2015). スポーツにおけるポジティブ体験・ネガティブ体験とスポーツハラスメント容認志向 東京未来大学研究紀要, 8, 93-103.
- 藤後悦子・井梅由美子・大橋恵 (2016). 子どものモチベーションを高めるスポーツ・ペアレンティング こども環境学研究, 12(2), 38-44.
- 藤後悦子・大橋恵・井梅由美子 (2017). スポーツ・ペアレンティング尺度及びスポーツハラスメント尺度の作成 東京未来大学紀要, 10, ページ数未定

The effect of negative human environment in a team on children's sports motivation

Etsuko Togo (*Tokyo Future University*)

Yumiko Iume (*Tokyo Future University*)

Megumi M. Ohashi (*Tokyo Future University*)

Parents' involvement is essential in community sports activities of elementary school students. Moreover, children's sports activities are known to positively and negatively affect the parent-child relationship. The following model was developed: Parents become hurt because their children have suffered harassment from coaches, teammates, and as a result, they urge their children to achieve better results, which increases neurotic tendencies in children, and decreases sport motivation in them. Multiple Group Structural Equation Modeling was conducted with fathers ($N=300$) and mothers ($N=600$) having children in fourth grade to high school. The results indicated that sports harassment increased children's neurotic tendencies, which decreased children's sport motivation. Moreover, sports harassment increased child-centered and dominant attitudes of parents, which also decreased children's sport motivation. It is suggested that educating coaches and parents in developing better relationships with children through sports activities is necessary.